

【目的】当院における冠動脈CT検査は、検査終了日から1週間から1ヶ月後に検査結果説明の診察という流れとなっていた。しかし、高度狭窄病変がある場合には素早い対応が出来ないことを問題視していた。そこで、検査直後に診療放射線技師による画像処理と一次読影を行い、有意狭窄を認めた場合には主治医に連絡するという業務改善を行った。今回、業務改善後における治療スケジュールの変化について報告する。【方法】2012年10月から2013年4月までに冠動脈CT検査を施行した外来予約患者845名を対象。診療放射線技師による一次読影で有意狭窄を認めた患者の治療スケジュールの動向について調査。【結果】一次読影によって有意狭窄を認めた患者70件(8.3%)。内訳として当日診察は42件(60%)、緊急PCIは5件(7.1%)。【考察】診療放射線技師が冠動脈CT検査直後に一次読影を行うという業務改善が、早期発見・早期治療の補助を行う事が出来た。また、無症候性心筋虚血患者も冠動脈CT検査の対象となりうる事が示唆され、業務改善が有用であったと考えられる。しかし、画像処理を行う診療放射線技師間の読影能力差が生じていて、過小評価・過大評価している症例もある。今後も循環器医師と密な連携を行うことにより、一次読影の精度を向上する必要がある。

評価1	評価2	評価3	採否
発表日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分～ 時 分

受付番号

演題番号